

分かちあいの会で語りを「引き出す」作業について

— 遺児たちの「自分史語り」のばあい —

Pilots for Telling Life Stories

— Their Presentation of Exposed Emotions and Anxiety with Their Own Duties —

時 岡 新

Arata TOKIOKA

はじめに

遺児たちの「自分史語り」の経験に訊いて、セルフヘルプグループ（自助グループ）における語りあい、分かちあいの会の構成、およびその過程を解析する¹⁾。本稿では語りあいの初発の段階における「先導役」のはたらきに照準し、一般参加者には要請されることのない、明確な企図のもとで語るという作業の特質を明らかにしたい。

家族成員の他界を経験した人びとによる語りあい、分かちあいの会は、しばしばセルフヘルプグループのひとつに数えられる²⁾。筆者はこれまで、遺児の分かちあいの会を対象としてセルフヘルプグループの持つ情緒的サポート（Katz 1993=1997:32）の側面にかんする調査と解析を継続してきた³⁾。その過程で、筆者は、セルフヘルプグループの特徴として挙げられる「メンバー同士の対等な関係」という理解（久保・石川編 1998:8）は、語りあいの経過を概括するばあいには妥当する（時岡 2003a）ものの、その初発の段階を把握するには必ずしも十全でないと判ずるに至った。遺児たちの自分史語りについていえば、そこでかれらが「先導役」と呼ぶ者の語りは、以下の各節で詳説するように、一般参加者と

は異質なものである。

遺児たちの自分史語りは、総じていえば遺児どうしが互いに聞き、話すことで体験や心情を思い返し、ときにそれらの対象化、相対化にいたる過程である（時岡 2004）。かれらはそこで“同じ”の語を多用するが、それらは経験の類似のみならず、語りあいの場における関係性をも意味して特徴的である。かれらは、対等で双方向的な発話と傾聴を心がけているという。とはいえ、語りあう時間のごく初発の段階をみれば、運営を担当する年長者と一般参加者とのあいだに、非対称と判じるべき関係性が確認できる。すなわち、参加者の誰にも先んじて語りをはじめ先導役の存在である。かれらは先導役の語り、一般参加者の語りをそれぞれ『引き出す自分史』『吐き出す自分史』と呼び、前者は後者を促すものと位置づけられている。本稿は前者、『引き出す自分史』を語った先導役らの経験に訊いてその特質を解析し、以てセルフヘルプグループにおける語りあいの過程をいっそう実情に沿うよう理解することに努める。

本稿が議論の対象とする遺児たちの「自分史語り」は、保護者等が死亡、または著しい後遺障害にある高校生、大学・専門学校生の

修学支援を行っているある奨学団体が、奨学事業とあわせておこなう催し（「つどい」と呼ばれる）のなかで実施されている。「つどい」は、夏の数日間、遺児たちが合宿しながらおこなわれる。そのなかの特定の日、特定の時間帯を区切って、参加者たちが死別やその後の体験、心情などを語り、聴きあうのである⁴⁾。

自分史語りの時間は次のようにすすめられる。始めに参加者全員があつまり、運営を担当する大学生リーダーの代表（先導役）が話す。その後10～15人程度の班に分かれ、上級の大学生リーダーが司会して、高校生の「つどい」では大学一年生リーダー、大学・専門学校生のそれでは二年生リーダーから話しはじめる。以後は話したいと思う者から話し、ひととお話し終えたところで司会者が話せばあいもある。以下では全体会の先導役を務めたT君、N君のふたりに経験を訊こう⁵⁾。

1. 「吐き出し」と思い返しの経験

セルフヘルプグループは、対面的な相互支援の原理を共通特性とし、内部に発生する援助関係を多方向化して援助者利得を配分する（稲沢 2002）。自分史語りの場で、自らの体験を話すことがほかの参加者を安堵させるさまを知り、能動的、積極的に語りはじめる遺児たちはその典型例である（時岡 2003b）。たほう、そうした相互支援原理は、メンバーの対等性を前提とするならば、グループの活動目標に掲げることができない、逆説的な原理であるともいわれる。このような実践上の困難にたいする遺児たちの自分史語りの活動における工夫のひとつが、上級生リーダーによる先導役の配置である。かれらは、一般参加者による双方向的な援助関係の開始に先立ち、企図して初発の援助者役割を取る。このときかれらが参照するのは自らの一般参加者

としての体験であり、それに拠ってみれば、相互支援は無為に発生するものではない。本節では、先導役のふたりに訊いて、かれらが語りあいの場をそのように設計、運営するに至った経緯を確認したい。

一般の参加者として訪れたはじめての「つどい」。T君、N君のふたりは、死別の体験やその後の生活、心情を誰かに話したいなどと、それまで、思うこともなかった。

T君は言う。「そうですね、訊かれたときに答えるんですよ。嘘はつきたくなかったんで。『親父、なにしてるの?』。…『ああ、俺の親父、いないんだ』って言うのと、恋人とかでもですね、それ以上、訊いてこないんですね。ばあいによっては『あ、ごめん』とか言われたりして。僕のばあいは、それ以上、話したくなかった」。それはとりわけ、父親への心情について。「一番話したくなかったのは、親父が嫌いだったってことで。父親が亡くなったことで泣いたことが、いちども無くなって。葬式のときでも。父親の死に顔を見ても。それって自分のなかで、『俺はこんなにも冷たい奴だったのか』って、思ってたんですよ。母親はすごいショックを受けていたんで、『なんであなたはお父さん亡くなって平気なの?』って。〔中略〕父親は嫌いだけど母親は好き。その母親からそう言われたのがですね、ほんとに僕は冷たい人間なんだなってほんとに思ってた。だから人には話したくなかったんですよ。これを話したら、ほんとに、ひどい奴だなんて思われてしまう」。父親の病状を知ったとき。友だちとの会話。かれは事ごとに、自分の“冷たさ”を思い出して筆者に教えた。

遺児たちの「つどい」では、なによりそれを話したくなかった。「まあ、親を亡くした人っていうのは、みんな親のことが大好きで、悲しんでいるんだとすごい思ってた。だから、

僕がここで話をしたら、嫌われてしまうんだらうな、と思ってたんですよ」。自分は遺児に偏見を持っていたとも、T君は言った。

本稿で訊くもうひとり、N君のぼあい。はじめての自分史語り、「イヤっていう感情を持ってたのが正直なところ」だった。「一応、しゃべるにはしゃべったんですけど、あの、ぶっちゃけイヤだったんで」。雰囲気がいやだった。「一分一秒、早く終われ！」と思っていた。また「正直、なにを言ったらいいか分からなかったんですよ。…家族のなかで親父の話をするのはタブーとか、そういうのは無かったですけど、父親のことを話す、思い出すとか考えるっていう機会が、ほんとずっと、無かったです。だから、その場でなにを話せばいいのか分からなかった」。話すだけではない。始めの全体会、また各班に分かれてほかの参加者たちが話すのを聞くことも、同じようにイヤだった。

とはいえ、ふたりは、それぞれに自分史を話した。

T君はふり返って、ほかの参加者の話を聞いたことがきっかけだった、と考える。「自分史のなかで、僕と同じような気持ちを話してくれる人もいて。〔それを聞いて〕話してもいいんだなって思ったら、すごく話したくなったんですよ」。かれはそこで父親が嫌いだったと話し、「はじめて泣けた」という。

たほう、N君は困惑のなかにいた。「人の話を聞くという方に集中することが、たぶんその時、できなくて。それよりか、早く終わってほしいという気持ちの方が、すごく大きかったんですよ。〔中略〕やっばこう、順に言っていくから、『あとひとり言ったら言おう』と」。なにを話せばいいのか、分からなかった。「で、こう、人が言うじゃないですか。で正直、それをかいつまんでかいつまんでかいつまんで、っていうことをしてたんですよ」。

かれと同じように、ガンで父親の他界した参加者がいた。闘病生活のようす、家族のこと、つらい気持ち。それを聞いて、「あ、僕はこれを言おう、という感じで」。まるで聞いた振り、泣いた振りのようだったと、N君は思い返して筆者に教えた。

ごく大づかみにいって、自分史語りの過程は“聞（聴）いて、言う（話す）”の順にすすむ（時岡 2003a）。T君のように、ほかの誰かの自分史を聞いて、自分も話したいと思ひ話す者。N君のように、聞き、それに倣って、いわば“型どおり”に話す者。むろん、至極当然ながら、なにも話さない者もいる。自分史語りの部屋から退出することもでき、ある「つどい」で筆者は長い時間、そうした参加者と将棋などさして過ごした。

一般の参加者はそうして、いろいろに聞き、話すのだが、「つどい」を運営する上級生リーダーたちはみな、参加者が話したいと感じるよう、環境づくりに努める。なかでも自分史の時間の始め、先導役として話す者にその心がけはつよい。

先導役を務める者が参加者に話してほしいと考えるのは、かれらがそれぞれに、自分史語りに“意義”をみとめるからである。遺児たちの「つどい」は、そのように考えて運営を担当する年長者たちが、工夫して、遺児たちの互いに聞き、話す機会を提供する催しである。T君、N君は、自分史語りによどのような意義があるとみて先導役を務めたのか。

ふたりは先導役を務めるに際し、自らの体験や心情などに照らして自分史語りの意義を次のように整序していた。はじめにT君のぼあい。「僕にとって一番最初に『吐き出せたな』って思うのは、父親が嫌いだったんだってことを吐き出せた。これは僕にとって、すごい楽になれた部分なんですけど」。“吐き出し”、“楽になれた”の言に注目して精察し

よう。吐き出しとは、具体的には父親にたいする心情を声に発して言った行為を指している。それを吐き出しというのは、心情を不快に感じ、かつ自らに強いてそれを隠して過ごして来たさま、また「つどい」に臨んで苦痛とともにそれと言ったさまを表そうとするためである。そうして、かれは楽になったという。なぜか。忽ちの事態からみれば何よりもまず、父親を嫌うかれの心情は従前の想像に違って、ほかの遺児たちから非難されることになかった。やがて、かれは父親をめぐる種類の心情を対象化し、それに解釈をあたえはじめ、楽になる作業を引きつづき継続していく。

T君「ほんと、よく言う“気づき”だなんて思うんですけど。自分に“心の傷”があったっていう意味で。僕のばあいは、父親を亡くしたことで全然悲しくない。だから、全然俺は冷たい人間だし、心に傷なんて無いんだって思っていましたけど、逆に冷たい奴なんだっていうふうにならずにずっと思いこんでましたけど、『そういう環境になって、そうだった』〔これに前後する筆者との対話のなかで、T君はそれを『僕的には思考停止かなっていう感じ』と言い表した〕って。あ、これが俺にとっての“心の傷”なんだなって、自分のなかで気づいて、自分のなかにおさめることができましたよね」。

かれらは過去の心情、行為にあたえた解釈を“気づき”と呼び、かれらの思うままにならず、御しがたいでき事や心情の記憶を“心の傷”と呼ぶ。ここでT君が用いた『おさめる』の語は特徴的である。かれはそれらを改

変したり、消し去るよう志向しない。いわば折り合いをつけるべく模索するのである。それらの作業の礎として、T君のばあい、父親への心情を声に発した経験、それを非難されなかった経験があった。

むろん、体験や心情に解釈をあたえる作業には、それ相当の時間を要する。N君のばあい、はじめての自分史語りは、ほかの参加者を「まねてるような喋り…内容だった」。思いみてかれは言う。「いま僕ら先導役として、参加者に『吐き出し』をしてもらおうという目的があるじゃないですか。たぶん、その目的には、達しなかった子だと僕は思うんです、自分で。でも、それがきっかけ…で、父親のこと考えるようになって」。かれが教える『きっかけ』の語は、筆者の訊いたほかの「つどい」経験者たちもしばしば用いた。それらは概ね、思い出や解釈などの作業を経た今日から翻って、その端緒となったはじめての自分史語りに認める肯定的な評価を表したものである。

N君「〔前略〕父親のことだったら、僕のばあいだと、小中高と父親がいなくてことを人に言えなかった状態から、「つどい」で、ま、少しだけでも、父親のことを話すことができた。〔中略〕家でも話さないし友だちでも話さない、というよりか話したくなかったから、父親のこと自体を。〔それは〕べつに意識的に忘れようとしているわけではないんですけど。〔それにたいし、「つどい」で話した後〕時間が経つにつれてどんどん忘れていったことを思い出す、っていう。その当時、俺はどんなことを思っていたんだろう、とか。たとえば物事の前後が分かったら、その時

こういうことを思ってたっていうのを思い出して、とか」。

長い過程についてかれの話した全体から、要点のみを示す。N君「人に話すことができた、それをきっかけにして、父親のこととかっていうのを思い出すようになった、と。その次が、父親はどういう思いで僕らを思っていたんだろう、とか。順番が、僕にはあったんですよ。そのひとつとして、友だちに、自分のことを言うっていう作業があったんですよね」。それは勇気の要ることだった。「友だちに『いない』って言えることで、ひとつの問題をクリアした。次の自分に進めることができた」。また、母親にあれこれと訊くようになった、とも。説明に充てた“クリア”“次に進めた”の言から、友だちや母親らに声を発した前後でみれば、N君は従前に比して事後を好ましく考えていると知られる。そのような機会を重ねるほど、最初の「吐き出し」の意義はいつそう増していく。

やがて「つどい」の先導役を務めるころ、N君はずっと以前のかれ自身に照らすようにして参加者たちをみつめ、語りかけるようになっていた。「僕は、何ていうか、フラストレーションというか、不快感、というのをすごく溜め込んで。封印というか、話さないように、話さないようにしてて。でもそれが何かすごく、気がかりだったんですよ、自分のなかで。話せないことの不快感を、すごく持ってたんですよ、僕」。だから参加者には話すことで思い出してほしい、また「不快感というものを解き放ってほしい」と。

T君、N君はこうして経験の思い返し、対象化と解釈を重ねた末に、『きっかけ』としての「吐き出す自分史」語りに多くの意義をみとめた。しかし一般の「つどい」参加者たちは、かつてふたりがそうであったように、

語りの意義などあらかじめ承知しているはずもない。先導役としてのかれらの模索について詳しく訊こう。

2. 「引き出す」ための自分史語り

セルフヘルプグループのリーダーシップは、組織化にかかわるものと運営にかかわるものとに大別される（高松 1995）。後者のうち、遺児たちの自分史語りにおける重大な課題のひとつは、そこで分かちあうことがらを自分たちで決めること、すなわち「問題を定義する主体性」（岡 1994）の宣言とその具体的な呈示である。初めての参加者がリーダーの語りを聴いて抱く『そういう話をしていいんだ』などの感想は、主体性の行使と認知を象徴的に表現している（時岡 2004）。とはいえ、たほうで、一般参加者の語りを促すための語りには、相応の共感が寄せられなくてはならない。そのような感情移入（松田 2000）を実現しうる先導役の語りとは、どのようなものであろうか。前節の経験から数年の後、機会を得て全体会の先導役を務め、「引き出す自分史」語りに臨んだN君、T君に訊いた。

あなたはどのように参加者たちに語りかけたのか。筆者に答えてN君は言う。「話せられるようにしたいっていうのがあったんです。〔中略〕『引き出す自分史』で参加者をどうしたかったかっていったら、自分史の〔時間に入るための〕雰囲気とか、〔そこで参加者が〕吐き出しやすいように雰囲気をつくり出すっていうことなんですけど」。かれの説明は、『引き出す』の語りに照らして消極的であるようにも感じられる。筆者、それが『引き出す』ことになるのか。N君「思い出すとか、こういうことも言ってもいいんだっていうことになると思います。参加者がそういうふうに感じてもらうっていうのが、僕にとっては『引き出す』っていうことなんですけど」。筆者、

語りかけ、『引き出す』ことは、何かしらの働きかけとはいえないだろうか。

N君「〔前略、それは〕話しやすい環境をつくり出すっていう行為なんです。その子が話すか話さないかっていうのは、ま、その子自身です。でも僕がはじめての『つどい』に思ったような、何を話したらいいかわからないから話したくないっていう、そういう感情は持ってほしくないから。何でもいから話して、っていうことで。とりあえず何でもいから話せばいい。何々だからダメだ、話せないからダメだっていうんじゃないで、そういう、話しやすいようにしていくっていうのは、僕にとっては“働きかけ”になるんです」。

話しやすいように。かれらはそう考えて、自身の話した経験を思い返す。まず、自分と同じような気持ちを聞いてつよく話したいと感じたというT君のばあい。「やっぱり、ひとつ、共感できる部分があるかどうかですごい重要だと思うんです。つながるっていう意味で」。かれの言う“共感”とは、とりわけはじめての参加者にとっては、ほかの参加者が語った体験や心情に、自分と似かよったところがあると聞き留めることである。

T君「少なくともその中にそういう人が一人いるんだなと。だから安心して話せたってというのが、僕がその最初に話したときに、いちばん大きな一歩だったんです。ただ遺児というつながりだけじゃなくて。僕のばあい、遺児はみんな自分の父親なり母親のことを亡くしてたりして、みんなも

う悲しくて、つらい思いをしてるんだっていうふうに、思ってたんです。だから、僕は遺児といっても完全に違うんですよ。でも、ほかにも〔同じように思う者が〕いるんだって気づかせてくれた人〔参加者〕がいて。で、つながりがあると感じられてはじめて話せたっていう部分なんですね」。

はじめて出会う男女の口から、自分と似かよった、あるいは一句違わぬ言葉を聞く。そのように感じ、思うのは自分だけではなかったと知る。つづいてかれらは自分の気持ちを口に出して言う。それにじっと耳を傾け、頷きながら聴く男女がそこにいる。このように感じ、思うのは自分だけでなかったと今いちど知る。以上を表してかれらは『同じ』、あるいは『つながり』の語を用いる（時間2003a）。T君は先導役として、参加者たちにそのような出合いの訪れるよう努めた。

たほう、ほかの参加者をまねるようにして父親の他界を話し、それが後に父親のことなどを思い返す『きっかけ』になったと考えるN君のばあい。自分は父親のことを考えたこともなかった。だからまずはそれを思い出し、ほしいとねがい、語りかける。

N君「〔前略〕参加者が、参加者自身の体験のとき〔たとえば死別、つらい気持ちなどになったとき〕の感情とか、そういうものになれるかどうかっていうところかとは、思ってるんです。言ってしまったら、導入の人の〔話〕でも誰〔の話〕でもそうなんですけど、結局は人の話じゃないですか。人の体験であって。でもその話を承けて、共感とかするっていうのは、

まあ〔それが〕似たような体験っていうのもあるんですけど、その、気持ちの部分が『あ、私もそのときそうだ』っていう共感…。〔そういう心情に〕なれるかどうかっていうところなのかなと思うんですよ。で、〔そのように〕参加者が思ったら、〔続けて〕『じゃあ、そのとき私はどう思ってたか』って、思い出していくというか、そこから考えていくことも、あると思うんです」。

参加者に、たがいの似かよった経験を聞き、また話したり、いろいろのでき事、心情などを思い出す機会、手がかりを得てもらいたい。T君、N君のふたりはそれぞれに企図して、導入の自分史を語ってみせた。ただし、とかれらは付けくわえて、それは一般参加者たちの「吐き出し」とは違う、とも言った。T君「でも、先導役の目的ってやっぱり、吐き出しじゃないわけですから。呼び水だと思って話すわけですよ。N君「〔先導役としての〕『引き出す自分史』は、導入とかそういう方〔位置づけ〕になると思うんですけど、〔それには〕さっき言った“感情”とか“共感”という部分もあるだろうし、思い出しとか、〔参加者が〕『これ言ってもいいんだ』って〔感じるようにする〕ところが目的だと思うんです」。目的を持った自分史語り。それが先導役としての「引き出す自分史」である。

いっそう踏みこんで訊こう。N君に質問、あなたが「引き出す自分史」で企図したことは何か。「気をつけてたのは、参加者に『あ、これもしかべっていいんだ、これもいいんだ』っていうような。『あ、こんなこともあったな』って〔いう〕思い出しの部分と、安心感、ですか。なんか、恥ずかしくて、自分史の場

でも言えないようなこととかでも話せて、話してもいいんだっていうような安心感が参加者に得られたら、とはずっと思ってたんです」。筆者、あなたにとって自分史語りの場での『安心感』とは何か。また先導役としての語りで、どのようにそれをめざしたか。

N君「僕は〔中略〕正直に話しました。はじめて行った『つどい』で、自分史の時間があって、でも僕はその場がすごくイヤで、その雰囲気はすごくイヤで、うそをついていましたとか、早くこの場が終わってほしいっていうふうに思ってたっていうことは、参加者の前で全部、正直に話しました。〔中略〕僕は、うそはつきたくなかったんです。その〔はじめての自分史語りの〕時もうそをついていたし。〔中略〕参加者に“こうなってほしい”って思ったとしても、そのとおりに全員が行くかっていうと、そうではない子もいる。一生懸命話してくれる子もいるし、僕みたいにイヤだと思う子もいるし。その時うけた感情は、人それぞれであって。ま、多くの人は、自分史をやった良かったとか、思い出せて良かったという方が多いと思うんです。でもその大きな枠に入らない子もいます。で、僕は、父親がいないっていうのを隠してた子なんです。なんで隠してたかっていうと、それは、みんな父親がいる、でも僕はいない、っていう、こう、少数というか。みんなと同じじゃないとイヤだという感覚がすごくあって、隠す。なんか劣等感みたいなものを持ってたんですよ。だからその、離れてしまった子

にも安心感というか、そういうのを
持ってほしいなって。みんながみんな、
上級生が立派に、すべてのものを
こなしているわけじゃなくて、こ
ういう上級生もいるんだよって言
いたかった。だから、話せないとか、
自分史をイヤだなんて思うことが、
絶対的にわるいわけじゃないんだよ
ってというようなこと、安心感を持
てもらいたかった」。

遺児たちの『安心感』にかんして、N君の
説明は重層的である。不可分にむすびつく諸
要素をごく大づかみに分節化して解析をこ
ころみる。第一、安心感を持ってもらいた
いというN君のねがいは、翻って、遺児た
ちの集まりそれじたいが“安心”の源泉
ではないことを意味する。先にT君の教
えたとおり、これらの『つながり』はた
がいに聞き、話す作業のうちに醸成さ
れる。N君らの考える「引き出す自分
史」語りの必要性も、そうした事情に
由来している。第二、とはいえ遺児た
ちの誰もが、そこで死別体験をふくむ
自分史を語ろうとするわけではない。筆
者につよく印象的だったのは、N君が
『大きな枠に入らない子』を喩えて、
父親の他界を隠していたかれ自身
のようすを言ったことである。父親の
不在も、自分史を話したいと感じない
ことも、なにを憚る謂われもない。け
れど皆と“同じ”でないことが、故も
しらず不快だった。いまやN君のも
とめる“安心”とは、それら不快の
念がとり払われた心情をこそ意味し
ている。

以上に言われる『安心感』をふまえ、
N君たちはもうひとつの目的、すなわ
ち参加者が体験や心情を思い出し、
それを『吐き出しやすいように雰
囲気をつくり出す』作業へとすす
む。筆者、そのためにあなたは、何
をどのように語ったか。

N君「(間)、恥ずかしくて言いた
くなかったことは言おう、と思っ
たんです。恥ずかしいっていうか、
〔闘病中の〕父親の容貌のことは、
あんまり言いたくなかったんです
よ。ま、ガンになって、抗ガン剤
投与されて、…〔具体的な容貌の
変化が話された〕。仕方ないこと
なんですけど、そのことは僕、正
直言いたくなかったんですけど。
(間)、僕にとってはすごく尊敬
する父親であって、(間)、なん
ていうんですかね、僕にとって
〔中略、そうした変化〕は、す
ごく、父親像がすごく崩れてし
まうことだったんです。その事
実っていうか、そういうことは
思い出してたんですけど、正直
そのことは、人には言いたくな
かったんです。言うことで自分
の中の父親像がまた崩れてしま
うか思ってしまうかもしれない
し、人に父親の弱みというか、
聞かれないというのもあった
んですけど。でもそれを僕が言
わなかったら、(間)、僕が言
わなかったら、参加者が、もし
そういう感情を持っていても
隠してしまうんじゃないか
って思ってた。本当に、それは
言いたくなかったんですけど、
〔参加者に〕話してほしい
から、僕は全体の前で話した、
ということがありました」。

遺児たちの自分史語りは、原則として
遺児たちのみによって行われる。そ
こでは、やがて聴き手となる上級
生は、それに先だち、一般の参加
者にむかう話し手になることができ
る。先導役を務めるN君は、参加
者に思い出し、吐き出してもら
いたいさまを、まず自分で実践
してみせた。先にT君、N君は
筆者に

「引き出す自分史」語りは一般参加者の「吐き出し」とは違うと教えた。それを敷衍していえば、先導役のかれらは、参加者にでき事や心情をより生々しく思い出させるという目的を持って、また不意にではなく努めて、激しい情感を吐き出してみせるのである。先述した知見にこれを補い修正したい。種種の目的を持った、意図的な吐き出し。それが先導役としての「引き出す自分史」である。

T君もまた、先導役としての目的を持った自分史では、話したくないと思うことを話した。「最初の吐き出しの時の自分史と〔は、中略〕全然違うんで、けっこう挑戦してきた部分があるんです」。それらを詳しく教えながら、かれは言った。「〔自分史の〕呼び水となるには、ほんとに、自分が話したくない部分も話さないと、みんなが話してくれないかなと思って、そういうのを出していくんですけど、ま、それは、どう反応が返ってくるかっていうのは、怖いですよ」。参加者の吐き出しやすい雰囲気、安心感を醸成しようとする「引き出す」語りには『怖い』気持ちや不安がともなう。かれらの企図と対照的にみえるそれらの心情は、しかし、「引き出す」語りの本質に迫る有力な手がかりである。

3. 挑戦と不安

語りあい、分かちあいの会がセルフヘルプグループであり、運営担当者（スタッフ）もまた当事者であるばあい、そうしたスタッフの存在は、参加者の目指す方向性を提示する意味を持つことがある。かれらは語りあい、分かちあう作業によって構成される心情、その変化の軌跡などを体験的に理解しているからである（鈴木 2003）。前節までに訊いたとおり、先導役は自らの「つどい」体験に照らして「引き出す自分史」を語るが、それはすなわち、かれらの当事者性が具体的に活用さ

れた一例である。たほう、そのような役割にかんして、かれらには、かれらが当事者である故のいろいろな逡巡があるという。以下ではそれらを精察して、これまで種種に指摘されてきた、セルフヘルプグループにおけるリーダーの負担感、運営上の困難（中田 2003）（黒川 2005）の深層を呈示したい。

その夏の「つどい」、明日には一般の参加者が集まってくる夜。N君は会場となる青年の家の一室で、ひとり坐卓にむかっていた。自分史の時間、先導役として何を話したらよいか⁶⁾。「俺はちゃんといい自分史が話せるのか、とか思いながら。でも自分のなかで、何がいい自分史なのか分からなかったんですけど」。前後の気持ちを思い返ししながら、かれはそれを不安だった、怖かったと言い表した。自分史語りの当日、かれは大勢の参加者たちの前に立った。「やっばこう、言った後も正直、不安だったんですけどね。〔中略〕でも〔別の運営担当の上級生〕が〔参加者に安心感を得てもらおうという観点から〕じゅうぶん役割として達成できてるとは言ってくれて、ああ、参加者にとってはよかったんだとか、思ったんですけど」。筆者、あなたの不安とは何か。それはどこからくるのか。

N君「〔前略〕たとえば自分史の導入の役目をちゃんと果たさなければならぬ、…それが、できないかもって思ったんです。〔中略〕あと、〔坐卓にむかって〕思い出したりして書いたりとかそういうときも、なんか、あんまり感情が無かったんですね、僕のなかで。書いて思い出して、書いても、自分のなかで感情が全然こもってなくて。うーん、つらい思いとか経験のことを思い出しても、なんか、昔はつらいと思ってても今は全然つ

らくない、とか思って。で、自分の感情がそこに行かないことが多かったんですよ。それは机の上での文でしかなくて、人に、自分はこのときにこういう気持ちだった、っていうのを話しても全然伝わらないだろうし、と思って。べつに泣けないのが悪いことじゃないと思うんですけど、全然、泣けなくて、考えているときとかも。泣けない…これは勝手に僕が考えてたんですけど、泣けないと自分史の、何ていうんですか、重たい雰囲気がつくり出せないのかなって思ってたんですよ。漠然とした印象だったんですけど、自分史っていうのはこう、泣きながら人の話を聞いてとか。そういう雰囲気がつくり出せない、〔自分に〕つくり出せるのかっていう不安が、正直ありました」。

N君の不安は、既述のような、かれの「引き出す」自分史語りが担ういくつかの目的に由来する。すなわち参加者に安心感を持ってもらうこと、でき事や気持ちを思い出し、話しやすい雰囲気をつくること、である。前者について、N君は自身の「つどい」体験を紹介しながら、きちんとできなくてもいい、何をどのように言ってもいいなどと話した。これについてかれの不安は少ない。たいては後者、雰囲気の醸成のために、かれはいろいろに準備し、逡巡していた。N君「ひとつは、失敗してしまうっていうんですか、別に話せることがいい〔ことだという〕わけじゃないんですけど、参加者が、思い出すとかいう部分ができなくて、何かヘラヘラした感じで班別の語りの時間に入ってしまうとか。そういうふうに、自分史の時間を壊してしまうかもし

れないっていう怖さがありましたね」。自分なりの整理、準備をしていた分、できたとは思った。けれど、当の参加者がそれをどのように受けとったのか不安だったと、N君は言った。

じっさい、どのような話題が参加者一人ひとりの琴線に触れるかは、あらかじめ知られない。N君は先に参加者の共感を重視すると筆者に教えたが、それは言うに易く行うに難い。にもかかわらず、N君の認識では、参加者の雰囲気は（けっしてそれのみではないとはいえ）N君の語りの関数である。かれの不安は、先導役としての自分史語りに寄せられる、またかれ自身が寄せる期待の存在と、それに応えようとするかれの姿勢を意味する。

筆者の訊いたT君、N君とは別の運営担当者は、感情の入っていない自分史語りは先導役としてよくない、とも言った。そうした任を務めて、N君は、言いたくないことを言うやり方を採った。いわば「吐き出し」をしてみせるのである。いまやかれの不安は、参加者たちの前で心情を吐露することの成否にあった。N君がその指標のごとく引きあいに出した“泣く”さまは、かれらのあいだで、話し手のつらい心情、口に出して言うことの困難を表すものとみなされている。先導役はそこで、激しい振幅で上下する感情と参加者のためにという目的との並立をめざしていると、N君は教えた。

一般参加者としての語りと先導役としての語りとは違う、前節でそう言ったT君。かれの「引き出す」自分史語りをもっとも短く形容するなら、それは『挑戦』である。

T君「僕のばあい、先導役をしなきゃいけないと思ったときに、今まで自分が話してる部分だけじゃ、共感なり、呼び水という意味で足りないと思っ

て。自分が今まで言ったことがない、要するに、今まで超えたことがないところですよ。それが吐き出しの部分になると思うんですけど、そこに挑戦したことがあって。それがやっぱり、〔参加者に〕どう受けとめられるかが、一番怖いんですよ。今まで受けとめ…てきてくれた部分というのは、たとえそこで〔参加者の〕反応が、『理解できねえよ』とか、そういうのが返ってきてても、たぶん大丈夫。自分のなかで理解してくれる人間がいるんだ、っていう〔ように思うことができる〕。でも、やっぱりその〔はじめて口に出す〕部分をして、こう〔拒絶するような〕反応が返ってきたら、怖いな、っていうのはあって」。

超えようとする挑戦、それにとまなう怖さ。T君の言葉はいずれも、かれ自身の自分史語りの経験を手がかりに精察することができる。すべての始まりは、ただ一人との出会いだった。「すごい勇気がいったんですけど、〔中略、その場にいる〕全員が分かってくれるから話そうっていうよりも、分かってくれる人が〔一人でも〕いるんなら話したい〔と思った〕」。はじめての自分史語りを思い返しながらか、T君は言った。「だから、僕の話をしてても分かんない人はいるだろうな、っていうのはあります。〔中略、けれど〕自分史を色んなところで話すことによって、〔中略、かりに今、受けとめてもらえないような反応が返ってきてても〕自分自身がどうなるか〔たとえば傷つくなど〕という部分では、大丈夫〔になった〕かな、と」。一度でも話し、受けとめてもらった話題ならば怖くない。しかしかれは、「話しても大丈夫」と感じられる事ごとを話すだ

けでは先導役に不足であると考えてる。『話したくない部分も話さないと、みんなが話してくれない』。すなわち、先導役は挑戦しなければならない、と。筆者、では、具体的に何を話したのか。

T君「ほんとに、涙も一滴も出なかったんですよ。（間）、亡くなってからずっと、『つどい』に来るまで。〔中略〕そのことで、僕は逆に、涙が出ないってことが、ほんとに自分のこと冷たいんだなって思ってた。夜、布団とかで寝るとき、寝れないときとかって色いろ考えて、自分のことは冷たい奴だなと思ったりして、むしろ、父親のことでわざと色いろ思い出そう思い出そうとして、わざと、涙を流そう流そうとしてたこともあるんですよ。で、この涙は本物なのかな、嘘なのかなと考えたり。…そういうことってほんと、〔ほかの『つどい』参加者には〕全然理解できないんじゃないのかなと思って。それが、やっぱり、話すの怖かったですけど、こういう〔中略〕感情の部分って、先導役としてすごい大切だと思いますから、自分の心の揺れみたいなのを話そうと思って、話をしました」。

先導役がそこで「吐き出し」てみせなければ、参加者の「吐き出し」を促すことはできない。ふたりは考えて、ともに『言いたくなかった』こと、『言ったことがない』ことを話した。N君は父親の容貌を、T君は自身の心情を。ただし、いまやかれらは先導役である。T君より先に、同じ気持ちを話してくれる者はいない。T君「もしかしたら、まった

く自分の話を、理解してくれないかもしれない。してくれなくて、しかもそれが態度なり行動なりに出てくるかもしれないという不安があるじゃないですか」。自分史には事実を話す部分と、感情や“負い目”を話す部分がある。後者を話して「それはお前が甘いガキだからじゃねえかみたいなことを言われるのが、やっぱり怖い」とT君は思う。受けとめられるのではなく、「はじきとばされる」ことが。続けて、かれは筆者に問うた。「自分史を聞いて、憤りを感じたことって、ないですか?」。遺児でない私は努めて傾聴していると、かれに答えた。かれは、先導役をやる人は当然のように、誰も不安に思うのではないだろうか、と言った。

先導役の語りには、しかし、安堵の機会も与えられている。T君は話し終えて、ほかの運営担当者たちと言葉を交わした。準備のおりに話せなかったと反省の弁。「僕がそう言うのを、聴いてくれたりとかですね、そういうふうに、受けとめてくれるような形〔応対〕をしてくれるので、まあ、ちょっとずつホッとできました」。一番良かったのは、班に分かれた語り合いに同席できたことだという。「〔全体会で〕話した後に、みんな〔参加者〕の話の聞いたのは、やっぱり僕にとっては落ち着いたなあ、っていうふうに思いましたね」。参加者に思い返しや「吐き出し」を促す先導役。かれらの不安、怖い心情を和らげることができるのは、かれらの語りかける参加者たちを措いて、ほかにない。N君のばあい。「〔自分史語り当日〕の夜とかに、班リーダーから『うちの班員で、N君がした自分史を聞いて、同じことを思ったとか言っていた』と聞いて、ああよかったんだなっていうふうに思いました」。先導役に応えるように自分史を語る参加者の姿は、先導役の「引き出す」ための「吐き出し」を、つよく支えているの

であろう。

おわりに

本稿で訊いたT君、N君の経験を基軸に、遺児たちの「つどい」で自分史を語る作業の諸特性を概括する。第一、それは進行上の原則にも由来するのだが、参加者はみな、ほかの誰かの自分史語りを聞いてから、それぞれの体験や心情を話しはじめる。はじめの全体会では先導役の、各班では班リーダーの自分史が、一般参加者に先んじて語られる。あとに話す者は、語られた経験に自分と似かよったところを見留めて、あるいは語りを誘因に思い出したことを、なかには誰かの語りを模倣するようにして、それぞれに口をひらく。すでに語られた自分史は、続く語りにも少なからず影響をおよぼす。

語りあう経験の後、また色いろの経緯をふまえて、自分史語りに肯定的な評価を与えた者のいく人かは、「つどい」の運営に携わるようになる。中核的な運営担当者の一人だけが、誰も話していない状態で語る者、すなわち全体会の先導役を務める。特性の第二、そこで先導役は“一般参加者が話しやすい環境づくり”を企図した自分史を語る。環境づくりとは、かれらがときに『共感』とも呼ぶ参加者の心情、たとえば先導役らの自分史を聞いて自らの体験や心情を思い返したり、自分も話したいと思う心境など、の醸成を意味する。先導役はあらかじめ話題を吟味、選択し、また当日は情感をあらわにして語る。涙をみせることも稀ではない。これを、かれらは「引き出す」自分史語りと呼ぶ。

むろん、参加者たちの共感を得る語りは、容易でない。そこで、第三に、先導役らはそれぞれに工夫し、これまでに話すことのなかった体験、話したくなかった心情などを自らに強いて語る。先導役の「引き出す」語りは、

一般参加者の「吐き出し」を促す目的であら
かじめ準備された先導役自身の「吐き出し」
を、その不可欠の要素とする。

以上のような先導役の語りは、第四に、不
安をともなう作業である。不安は、それが目
的をもった語りであることに由来する。かれ
らの語りに共感しなければ、参加者は自分史
を話そうとしないかもしれない。そう考えて
先導役は、自分の語りは皆に受けとめられる
だろうか、情感をじゅうぶん顕してみせるこ
とができるだろうか、と逡巡する。かれらの
語りあい、総体としてみれば死別体験に架
橋された相互作用の集積（時岡 2003b）で
あるが、その初発の段階においては一方向的な
語りかけを要する。

本稿のふたりから離れて、筆者の聴いた先
導役たちの語りの全体にかんして幾つかを記
す。かれらは、与えられた時間のうちに、い
ろいろの体験や心情を話す。参加者の琴線に
触れる可能性を高めるためである。運営を担
当する年長の遺児のひとりには筆者に、父親が
ごく幼少期に他界したので、自分は先導役に
適しないと言った。父親との思い出を話して
共感を得ることができないから、である。そ
の遺児は、班別の語りあいで故人の記憶が
ない悲しみを話し、つよい共感を得たという。
また別の先導役は、広い会場で参加者に聞
こえやすいよう心がけた。声の大きさ、音響
設備、時間の長短などに配慮した。

先導役を務める者たちは誰も、参加者ら
の語りに資することを宗として務めた。それ
でも、筆者の聴いたかぎり、かれらの語りは
個性的であった。そこには、かれら一人ひと
りの自分史語りに見いだす意義、寄せる期待
が投影されていたはずである。たとえば過去
の経験よりもむしろ将来の夢について多くを
語った者、など。本稿はそれを主題としな
かった。以後、考究の課題としたい。

註

- 1) 「自助グループ」の語を「セルフヘルプグループ」の訳語として用いることには留意すべき諸点がある（岡 1990:111）。本稿ではそれを踏まえつつ、しかし議論の対象である遺児たちの自らの活動にたいする用語法に従い、冒頭のみ「自助グループ」の訳語を併記する。
- 2) 分かちあいの会を実践する立場からは、若林（〔1994〕2000）（2004）など。分かちあいの会とは、具体的には、共通する状況下にある構成員どうしが関連したでき事、心情、考え方などを互いに交換する（語りあう）機会を意味し、多くのセルフヘルプグループにみられる特性の一つである（岡 1997, 1999）（久保・石川編 1998:2-20）（高松 2004）。
- 3) 筆者は1999年以降、分かちあいの会の参与者として、あるいは事務的な運営スタッフとして、毎年1ないし2か所の「つどい」に参加してきた。本稿で訊くふたりとはそこで面識を得、また同時にラポールの形成に努めた。しかし、いうまでもなく、分かちあいの会で筆者の知った詳細はここでは述べない。本稿ではかれらの筆者に教えたことがらを解析の主たる対象とする。なお、過年、筆者も参画して「つどい」参加者全体にたいする意識調査が行われているが、本稿のふたりの先導役としての「代表性」を検証するには不足である。本稿を、今後、語りあいの場の構成を量的に調査、解析していくための基礎資料として位置づけたい。
- 4) 本稿でみる遺児たちの「つどい」は、保護者等が死亡、または著しい後遺障害にある高校生、大学・専門学校生の修学を支援する「あしなが育英会」が、奨学事業とあわせておこなう催しである。近年の状況は自死遺児編集委員会・あしなが育英会編（2002:234-49）を参照されたい。
- 5) T君へのインタビューは高校生の「つどい」会場その他で行い、テープ録音により記録した。2004年8月12日、8月20日。N君へのインタビューはかれの居宅で行い、テープ録音により記録した。2004年9月13日、12月14日。
- 6) 先導役をはじめとする上級生リーダーたちはこのようにして、自身について距離をおいてみる（Gartner & Riessman 1977=1985:121）機会を得る。なお、Gartner & Riessman の議論は、セルフヘルプグループでメンバーが相互に援助の役割をとる点に注目している。その主張に異論は

ないが(たとえば一般参加者の互いに聞き, 話す過程はこれにあたる), ここで照準するのは, そうした過程の端緒で先導役が得るところの「自身についてみる」機会の特性である。

文献

- Gartner, A. & Riessman, F.,1977, *Self-help in the Human Services*, San Francisco: Jossey-Bass Inc. (=1985, 久保紘章監訳『セルフ・ヘルプ・グループの理論と実際』川島書店.)
- 稲沢公一,2002,「セルフヘルプ・グループの原理—相互支援原理を中心に—」『保健の科学』44(7):489-92.
- 自死遺児編集委員会・あしなが育英会編,2002,『自殺って言えなかった。』サンマーク出版.
- Katz,Alfred H.,1993, *Self-Help in America: A Social Movement Perspective*, New York: Twayne Publishers. (=1997,久保紘章監訳『セルフヘルプ・グループ』岩崎学術出版社.)
- 久保紘章・石川到覚編,1998,『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規出版.
- 黒川雅代子,2005,「セルフヘルプ・グループとソーシャルワーカーとの関係のあり方—グリーフケアのセルフヘルプ・グループのリーダーの事例研究—」『社会福祉士』12:103-9.
- 松田博幸,2000,「セルフヘルプ・グループにおけるコミュニケーションと感情」『日本福祉大学研究紀要—現代と文化』103:29-37.
- 中田智恵海,2003,「セルフヘルプグループ運営上の課題とセルフヘルプ支援センターの役割」『社会福祉実践理論研究』12:75-85.
- 日本地域福祉学会,1997,『地域福祉事典』中央法規出版.
- 岡知史,1990,「セルフヘルプグループの概念をめぐって」『社会福祉学研究』31(1):103-27.
- ,1994,「セルフヘルプグループの援助特性について」『上智大学社会福祉研究』1994.3:3-21.
- ,1997,「当事者組織・セルフヘルプグループ」日本地域福祉学会『地域福祉事典』中央法規出版,126-7.
- ,1999,『セルフヘルプグループ』星和書店.
- 鈴木康明,2003,「死別体験者のためのサポート活動—セルフヘルプグループとしての『わかちあいの会』—」『ターミナルケア』13:380-3.
- 高松里,1995,「セルフ・ヘルプ・グループにおける

- リーダーシップ」『教育と医学』43(9):11-6.
- ,2004,『セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイド』金剛出版.
- 時岡新,2003a,「言わないという不快, 話せるという安堵—遺児の語りあう経験から—」『社会学ジャーナル』28:113-24.
- ,2003b,「故人をめぐる対話—子どもたちによる“分かちあいの会”のぼあい—」『年報筑波社会学』15:82-93.
- ,2004,「『当事者グループ』経験の諸過程—遺児たちの『つどい』に取材して—」『社会学ジャーナル』29:199-217.
- 若林一美,[1994]2000,『死別の悲しみを越えて』岩波書店.
- ,2004,「死別による悲しみ—セルフヘルプグループの役割について(1)—」『山梨英和大学紀要』3:59-67.

※本調査, 研究は財団法人東海学術奨励会による研究助成(平成16年度)を受けて実施されたものである。